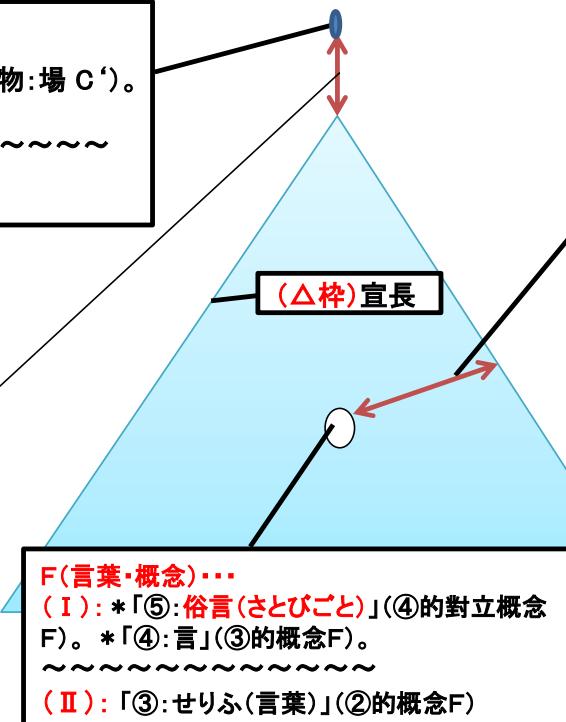


小林秀雄著『本居宣長』:二十三章主題[〔I〕宣長『言語觀(言靈論)』]。及び〔I〕と、〔II〕恒存『演劇的關係論』との一致(「關係論」的纏め)。

(I)『言靈』關係論:《『言靈』(物:場 C')とは、その知的理解、即ち「語(物:場 C')⇒釋(D1)」ではなく、その働き[即ち、合體(Eの至大化)=轉義(D1の至大化)]である》  
 \* ①『萬葉』(物:場 C')②『言靈』(物:場 C')③古言(物:場 C')⇒からの關係:「①に現れた②といふ③に含まれた、②の「④:本義を問ふ[知的理解、即ち:語(物:場 C')⇒釋(D1)する]のが問題ではない」⇒⑤:俗言(さとびごと)(④的對立概念F)⇒E:「⑤の働きといふ『具體的な物』(即ち:F⇒Eの至大化)としつかりと合體(Eの至大化)して、この同じ古語(②『言靈』)が、どう轉義(D1の至大化)するか、その様[即ち、合體(Eの至大化)=轉義(D1の至大化)]を眼のあたり見る(Eの至大化)のが肝腎なのである」(⑤への距離獲得:Eの至大化)⇒宣長『うひ山ぶみ』(△枠)。  
 \* ①語義[然り云ふ本(物:場 C')]②古人(物:場 C')⇒からの關係:①を分析して本義正義を定める(D1の至小化)は緊要にあらず(D1の至小化)。「③:②の用ひたる所(D1)を、よく考へて(D1の至大化)[即ち、P219『すべて人・よみ人(物:場 C')の心(D1)を、おしはかりえて(D1の至大化)』]」⇒「④:言」(③的概念F)⇒E:「云々(しかじか)の④は、云々(②)の意(D1の至大化)に用ひたり(Eの至大化)といふことを、よく明らめ知る(即ち、Eの至大化=D1の至大化)を、要とすべし。④の用ひたる(Eの至大化)意(D1の至大化)[即ち『よみ人②(物:場 C')の心(D1の至大化)』]をしらで(D1の至小化)は、其所(②)の文意(D1)聞えがたく(D1の至小化)、又みづから(△枠)、物(物:場 C')を書く(D1の至小化)にも、④の用ひやう(E)たがふ(Eの至小化)こと也」⇒宣長『うひ山ぶみ』(△枠)。  
 (II)演戲的關係論:①場(C')⇒からの關係(①から生ずる):②心の動き(D1の至大化)を⇒「③:せりふ(言葉)」(②的概念F)⇒E:③の力學(③の用法:Eの至大化)で形(E)ある物にして見せる(Eの至大化)」(③への距離獲得:Eの至大化)⇒人間(△枠):①への適應正常。(恒存評論『せりふと動き』)  
 ①場(C')⇒から生ずる:「②關係(D1)と稱する實在物(D1の至大化)は、」⇒「③:言葉(F:せりふ)」(②的概念F)⇒E:「潛在的には一つの③によつて表し得る(E)。故にその③との附合ひ方[言葉の用法・言葉との距離測定・フレイジング・so called(即ち:Eの至大化)]によつて、(△枠)は①との關係の適應正常化(D1の至大化)が叶へられる。即ち「Eの至大化=D1の至大化」⇒人間(△枠)。

(物:場 C')…  
 (I): \* ①『萬葉』(物:場 C')②『言靈』(物:場 C')③古言(物:場 C')。  
 \* ①語義[然り云ふ本(物:場 C')]②古人(物:場 C')。  
 ~~~~~  
 (II): ①場(C')

からの關係(D1の至大化)  
 (I):  
 \* 「①に現れた②といふ③に含まれた、②の「④:本義を問ふ[知的理解、即ち:語(物:場 C')⇒釋(D1)する]のが問題ではない」。  
 \* ①を分析して本義正義を定める(D1の至小化)は緊要にあらず(D1の至小化)。「③:②の用ひたる所(D1)を、よく考へて(D1の至大化)」。  
 (II): \* (①から生ずる):「②心の動き(D1の至大化)を」。  
 \* から生ずる:「②關係(D1)と稱する實在物(D1の至大化)は、」。



E: [F(言葉・概念)との附合ひ方・用法]…「So called」「Fと(△枠)との距離獲得」(Eの至大化)。  
 (I): \* 「⑤の働きといふ『具體的な物』(即ち:F⇒Eの至大化)としつかりと合體(Eの至大化)して、この同じ古語(『言靈』)が、どう轉義(D1の至大化)するか、その様[即ち、合體(Eの至大化)=轉義(D1の至大化)]を眼のあたり見る(Eの至大化)のが肝腎なのである」(⑤への距離獲得:Eの至大化)。  
 \* 「云々(しかじか)の④は、云々(②)の意(D1の至大化)に用ひたり(Eの至大化)といふことを、よく明らめ知る(即ち、Eの至大化=D1の至大化)を、要とすべし。④の用ひたる(Eの至大化)意(D1の至大化)[即ち『よみ人②(物:場 C')の心(D1の至大化)』]をしらで(D1の至小化)は、其所(②)の文意(D1)聞えがたく(D1の至小化)、又みづから(△枠)、物(物:場 C')を書く(D1の至小化)にも、④の用ひやう(E)たがふ(Eの至小化)こと也」。  
 ~~~~~  
 (II): \* ③の力學(③の用法:Eの至大化)で形(E)ある物にして見せる(Eの至大化)」(③への距離獲得:Eの至大化)。  
 \* 「潛在的には一つの③によつて表し得る(E)。故にその③との附合ひ方[言葉の用法・言葉との距離測定・フレイジング・so called(即ち:Eの至大化)]によつて、(△枠)は①との關係の適應正常化(D1の至大化)が叶へられる。即ち「Eの至大化=D1の至大化」。